つぎは、わたしたちの番

石垣市立真喜良小学校　三年
佐伯　美羽

「美羽、へいわな気もちって、どんな気もち？」
お母さんが、わたしに聞きました。
「ワクワク、しあわせ。」
「じゃあ、へいわな気もちのぎゃくは？」
わたしは、いっぱい考えて、
「なきたい気もち、かなしい気もちかな。」
と答えました。それから、わたしとお母さんで、へいわとそのぎゃくを、いろいろくらべてみることにしました。
「へいわは、あったかくて、ピンク色ってかんじ、そのぎゃくは、まっ暗でつめたいかんじがする。」
わたしが話すとお母さんも、
「へいわは、フワフワでプヨプヨ、はんたいは、とげとげしくて、グチャグチャだね。」
と続けました。
「へいわは、わらい声があってキラキラ、そのぎゃくは、かなしい顔やこわい顔、どんよりしているから、わたしは、きらい。」
すかさず、お母さんがやさしく言いました。
「美羽は、そんなどんよりした気もちになったことはある？」
わたしは、お母さんとケンカしたときのことを話しました。すると、
「美羽、お母さんのひざの上においで。」
と言ったので、わたしがすわると、ギューッとだきしめてくれました。
「美羽、お母さんとケンカしてかなしい気もちになっても、こうやってギューッってされると、しあわせな気もちにもどれる？」
「うん。」
わたしは、にこにこ声で答えました。
　それからお母さんが、今から七〇年いじょうも前に、わたしの住んでいる石垣島にもあったせんそうについて、話してくれました。
「世界にはまだ、せんそうをしている所があって、まっ暗なつめたい所に、ひとりぼっちでないている子がいるんだよ。その子には、ギュってだきしめて、安心させてくれる家族がいないかもしれない。せんそうって、本当にこわいね。」
　わたしは、フワフワあたたかい、キラキラなえ顔にかこまれてすごせることに心からかんしゃだなと思いました。
「お母さんも美羽もおじいちゃんも、せんそう体けんがないから、本を読んだりへいわきねんかんをたずねたりして、せんそうのこわさを学んでいこうね。」
　せんそうがおわって七〇年、日にちで数えると二万五千五百五十日、さらに、時間にすると、六十一万三千二百時間。この年月は、わたしには長く、そうぞうがつかないけれどせんそうを二どとおこさないことをたしかめ合ってきたんだなと、思いました。
「これから先の年月は、わたしたちがへいわの大切さをつたえていく番だね。」